

情報化／消費化社会に未来はあるか

見田宗介



橋爪大三郎



Does the Information /Consumption Society Have a Future?
MITA Munetsuke and HASHIZUME Daisaburo

いま何を考えれば
社会科学になるのか

橋爪——見田さんが昨年出された『現代社会の理論』[★1]の基本的なメッセージは、いま何が問題で、何を考えれば社会学、社会科学になるのか、ということだと思います。特に新しい情報が提示されているわけではない。環境問題はワールド・ウォッチ・レポートあたりがベースだろうし、消費社会論にはボードリヤールなどの先行業績がある。それらをただ追うのではなく、どういうサイズで章に組み立てて、解決すべき順番を提示するかに、この本の最大のポイントがある。あとがきで「社会の学を学ぶものにとって、生涯の情熱を集注して悔いることの

ない課題といえる」と書いていらつやいますが、若い社会学者もこの問題に取り組み、と叱咤しているのだと私は受け取りました。その問題とは、産業社会の課題の根本が変わったということです。かつては体制の問題があったが、いまそれが二義的になり、ほぼ解決したとき、環境の壁が立ちはだかってきた。豊かな者と貧しい者、支配者と被支配者がいるという永遠のテーマを、産業社会は環境の壁があるかぎり解決できない。現在の先進国の議論はおおむね対症療法ですね。炭酸ガス削減とか、低開発国援助で人口にストップをかけようとか。しかし、もっと根本的なところにわれわれの思考が及ばない限り、にっちもさっちも行かないだろう。いずれ考えなければならぬという問題をいま提示す



るというメッセージが、この本の読みどころだと思ったのが第一印象です。

重要なのはそれを、見田宗介という社会学者が述べていること、他の人ではダメなんです。私は『人間解放の理論のために』[★2]や『価値意識の理論』[★3]を読んで、見田さんの像を造ったんだけど、人間の幸福と実存の問題を考えてきた社会学者がいまマクロ問題を取り上げる、ここに意味があるわけです。マクロ問題しか考えていない人ではなく、ミクロ問題を真剣に考え、自分のフィールドにしている人が、「自我と愛、アイデンティティとリアリティ、生きることの意味の感覚の変質、等々——を徹底して考察してみたいと思っているうちに、そのための前提の作業として、現代社会の基本的な構造についての堅固な理論を、確立しておかねばならないと考えるようになった」(あとがき)と述べるところにこそ意味があると思う。

見田——じつはぼくが一番やりたかったのは、ソフトの問題というか、現代社会の中で自分とか自我とか主体とかアイデンティティと言われていたものがどういうかたちになって壊れたり再編成されていくのかといった問題と、ミクロな、「愛の不可能性」と言われているような問題や関係の矛盾の問題なのですが、それをやるにあたって依拠すべきハードな理論があるように思われていた時代が昔はあった。しかし現在それがないことが明らかになったので、自分なりに納得できることをまとめないとソフトな問題を考えていくためのベースが作れない。それでそこからやったということがありますね。

橋爪——次に第二の印象として、見田宗介という社会学者のミクロ社会理論はどのようにできているのかを私の理解で言いますと、まず見田さんは断固近代を擁護する、という譲れない線があると思います。近代主義者であり、合理主義者です。人間の(権利というよりは)自由、一人ひとりの人間の潜在的な可能性をどこまでも伸ばしていくことが幸せであり、これが正しいし、近代はこのためにできた社会だ、というはっきりした立場をとっている。およそ近

代人は誰でもこういう立場だとは思いますが、それが極めてはっきりしているという点に見田さんの特徴がある。近代主義者にもいろいろなタイプがあると思うんですね。たとえば日本にはマルクス主義の近代主義者がたくさんいました。個人の幸せを実現するのにマルクス主義にのっつて社会問題に対処すればいい、とセットにして考える人たちです。これは時代にもよるし、見田さんの資質にもよるでしょうが、マルクス主義が優勢であった時代にもかかわらず、見田さんのミクロ理論はマクロ理論とはそのようには接合しない道を選んだ。フリーハンドでミクロな世界を基準にマクロを考えていくというスタンスを、たぶん誰よりも早く採られたと思います。

見田——いまのお話には正確に思い当たるところがあります。ぼくはどちらかというと反近代主義者というイメージをもたれているんですが、橋爪さんはぼく自身でもうまく言えなかったことを言ってくれたと思います。確かにぼくは『時間の比較社会学』[★4]などいろいろなところで近代批判をやっていますが、基本にあるのはある種の近代合理主義に対して、身体の全体性とか感性とか自然性みたいなものを強調して、いわゆる近代主義ではない、ぼくなりに良いと思うものを評価してきているわけです。近代の本質がどこにあるかという、いま言われたような、人間の自由に対する信頼を原理に置くということと、個人というものが確固としたユニットなんだということです。ぼくは共同体論者と位置づけられることもあるわけですが、基本的には違うと自分で思っていたのは、確かにコミュニケーションといわれるようなものが好きなんだけど、ぼくは個の自由を抑圧するようなタイプの共同体を断固受けつけないんですね。そこから自由に解き放たれるようなコミュニケーションが好きで、あまり言わなかったけれど、それを橋爪さんに正当に見抜かれていたことに驚きました。

橋爪——近代批判と近代擁護がなぜ両立するかというと、近代を批判する原理がやはり近代だからです。できあがったマクロな制度は悪い近代なんです。それは本来近代が意図していたものからはこん

なに逸脱しているという批判の仕方だと思う。近代が何であるかについては議論があるところですが、個人とか自由は近代の最大の成果とされているものだから、そこに立脚点を置くならば、どういう近代的な制度を反体制的に批判しても、近代の中では正当性をもちうるし、そこに見田さんの言論の影響力や強さがあると思う。

ところで私の話もすると、私自身も断固近代主義者のつもりなんです。近代が好きだし、それ以外に立脚点はないと思っている。だから共同体主義にすんなり足を踏み入れたりほしくないし、マルクス主義、ポストモダニズム、アンチ・モダニズムにもすんなり足を踏み入れたりほしくない。でも先行者としての見田さんをそばで見ていて、自分の立脚点が、同じ近代でもちよつと違うという感覚がしていた。そして私は言語というものに興味をもったわけですが、なぜかという、そこでは自由と規則が両立するという関係がある。自由があるためには規則がなければならず、秩序があればあるほど自由がふくらんでいく世界のように感じたわけです。それから個と社会全体ということで考えると、言葉はコミュニケーションですから個がはつきりすればするほど全体につながる回路が開かれていくという点がある、これは私が社会学を武器にして社会を考えていくうえで、とても楽で自然な発想だった。もし個＝自由というふうに考えてしまうと、全体は個を抑圧するんじゃないかと常に考えねばならず、自由に対して不自由とか規則とか制限とか制約とか、必然というものがのしかかってきて、いつもそのことを考えなければならなくなる。そう考えたこともかつてはあったけれど、それは私には向いていないような気がして、個と自由を考えると時の補助線をずらしてみたいと思ったのが、私が言語にこだわった理由です。これが私の自己分析ですが、私はそう考えているゆえに、見田さんがやっておられることが自分との対比でくつきりと意識されたということはあると思います。

南北問題と環境問題

橋爪——『現代社会の理論』の第2、3章は環境／資源問題と南北問題に割かれています。環境問題は「本当にどこまでも幸せになれるのか」という問題、南北問題は「みんながどうやって幸せになるか」という問題だと言えると思います。『人間解放の理論のために』でもこの問題、特に南北問題は論じられていた。一人ひとりが独立の欲望をもっているときに、みんなが幸せになるかどうかは必ずしも分からない。しかしまったく不可能なわけでもなく、見田さんはその条件として、欲望の集列性とか相乗性とかを述べられたと思います。一人ひとりの欲望が他の人間の欲望を包み込み止揚して、他の人間が幸せになればなるほど自分が幸せになるという、そういう関係がもし設定できれば、皆が幸せになり、しかもどこまでも幸せになることができる、こういう理論的可能性を示されたと思う。ただこれが実際にどういうマクロな社会的条件なのかは、社会主義を改造するコミュニンの可能性として語られていただけで、具体的ではなかった。この本では、南北問題が危機に瀕していること、環境問題の解決に限界がありそうだということを指摘している、そういう意味で危機がたいへん具体的だ。しかもミクロ理論にしか興味がない人だけでなく、マクロ理論を考えている人にも訴えかけるというスタイルになっている点がこの本の特徴だと読めるんです。

見田——基本的にはぼくは情報化／消費化社会はじゅうぶん未来に向かっての可能性があると言いたかったんですね。ただ、その場合に抜かしてはいけない問題が、環境資源問題や南北問題だろう。なぜならば情報化／消費化社会に未来がないんだという考えを支持する強い理由がこの二つの問題だと思われるからで、情報化／消費化社会の肯定論者はその問題を適当に扱うのではなく、逃げてはいけないだろう。それに比べれば不平等は大した問題ではないんじゃないかと——そう言う物議をか

もすかもしれないけど——内心思っていて、環境資源問題や南北問題を正面に据えて、どう解決できるかが言えないと、情報化／消費化社会を肯定的に描く立場としては良心的ではないだろうと思うので、一番ハードな限界として、肯定論に対する批判的な論拠としておくことは出てきたわけです。

橋爪——見田さんは未来への可能性について、クリアすべき基準が極めて厳しく、高い閾を設定している。私の基準はそんなに高くないんだけど、それでもかなり未来は厳しいと思うんです。見田さんは閾は高いのに可能性があるという結論になる。だからどうしてそういう確信をもったのか非常に興味があります。ごく普通の生活することさえ今後は困難になるだろうと、さまざまに予測されているわけです。人口が2050年に150億になるだろうとか、炭酸ガスの濃度、地球温暖化など、多くの予測ではあまりうまく行かないわけですよ。それを真に受けて、私はこれは大変だと思ったんですが、どうすればそこにそれほど厳しいマイクロ理論の基準をクリアするような私たちの共生の可能性が出てくるのか。一つはマテリアル(物質)ということに相対的に距離をもっている概念の系列がありますよね、そこが重要なんでしょうか。

見田——厳しい問いですね。一番手もとのことから言うと、昨年の三大ヒット商品は「プリクラ」と「ファイナルファンタジーVII(FFVII)」と「たまごっち」だと言われている。「FFVII」のCD-ROMは2枚で6800円で、マテリアルの原価は数百円以下、あとは情報の価値です。情報化と消費化はセットになっているわけで、情報化をてこにするならば、資源収奪を減らすかたちであってもマーケット価値を増大させることはできる。それは何でもないことだけれども大事なことで、まず一番現実的な手前のところで、いまの市場経済とか消費社会を前提としたうえで環境資源問題をどうクリアできるかということが、一つのポイントだと思いますね。資本主義に必要なことはマーケット需要が拡大していく可能性があり、その空間が無限であることですけど、その必要を、資源

収奪と環境破壊を減らしながら実現するという難しい課題が、情報化によって可能になる、と考えているんです。本では古典的な例として「ココア・パフ」を挙げたんですが、これはプリクラや「FFVII」「たまごっち」についても言えるだろう。

そして南北問題がどうして必然かということ、あまり一般的な常識にはなっていない。さまざまなデータをふまえると、南北問題は北の豊かな高度消費社会のしわ寄せという面が強いと思うんですね。典型的なのはアフリカなどで、大洪水や干ばつなどの自然災害によって飢えが発生すると報道されるけど、それはじつは彼らが必要な食料を作っていた場所が多国籍企業などによって先進消費国向けの嗜好品の畑のために、現地の独裁的な政権などをてこにして奪われ、一般民衆の基本食料を供給するための場所が自然条件の恵まれない周辺地に追いやられたからです。そういう土地は災害の被害を受けやすい。豊かな国のテレビには洪水や干ばつだけが映るけれども、背後にはそういう問題がある。同じことはどうして独裁政権があるのかという話や、人口問題についても言えるわけです。逆に言うと資源収奪なしに豊かな社会が展開できる可能性があれば、収奪しなくて済む可能性があるわけです。だから環境資源問題を基本的に解決しようということとは南北問題を解決しようということだと思えますね。ただ確かに楽観的すぎるという人たちが多いわけで、かなりコントロールや規制をしなければダメだという意見があります。たとえば21世紀の前半ぐらいまでは国際的合意で強力にコントロールしなければ人類が生き延びられないだろう、というのはそのとおりだと思うんですね。ただしそれはトネルであって、その向こうには明るいものが開かれてあるということが大事だと思うんです。基本的には情報化／消費化社会は資源収奪を無限にしなくても存続が可能だということがあるからこそ、そこに至るまで50年くらいコントロールして我慢する気も出てくるだろう。どうせ人類が減びてしまうと考えられるなら、マンハイムの「予言の自己成就」じゃないけど、

我慢しようという気にはならないと思うんです。ですからコントロールも何もいらぬというような楽天的なことを言っているのではないんです。

橋爪——希望が必要で、そしてコントロールも必要で、これはセットであって、ある程度未来についての見通しがないと現在を乗り切っていけないだろうというのは大変説得力のある発想法で、私もそう思うんです。ただ、ではどういう規制が必要かという点について、細かいイメージが違ような気がします。賛成できることを言うと、経済的な付加価値をマテリアルに依存しないかたちに誘導して行って、環境への負荷を減らしていても自由経済システムは機能するだろうというのは、可能性のある限りやってみる価値はある。ドイツなどで最近、製造者が廃棄過程まで責任をもち、そのコストを製造原価に加えるべきだとか、かなり強力で推進していますね。その考え方に近いし、その延長にあると思うんです。

昔、資本主義社会がこのまま発展したらどこへ行くのだろうと思考実験をしたのですが、可能な限り自然に近づいて行くんじゃないかと思ったんです。たとえば電線が張ってあるのはエネルギーが必要なところに届かせるためなんですけど、大変粗放な方法ですね。しかし自然には太陽光とかいろいろあって、エネルギーが必要な所に届くようになっている。それから昆虫とか細かい生き物がいて、植物が微量金属を集めたり、いろいろなことをしているんですけど、これはある調和であって、人間の人工世界がそういうものを模倣する方向に進んで行くんじゃないかと想像したのです。最近のマイクロロボットとか高温超電導とかは、そういう方向を目指しているのかなと思います。まあだいぶ先の話ですけれどね。

見田——資本主義は可能な限り自然に近づいていくんじゃないかという話は、じつは大賛成なんです。文化が発達すればするほど自然から遠ざかるといえるのはどグマだとぼくは思っているんですね。たとえば服装にしたって近代初頭やヴィクトリア朝の時代より、いまのニューヨークを歩いている人の方がは

るかに自然に近いでしょう。そもそも封建時代から近代になるときは一種の脱文化化だったんですね。封建時代のあまりにもいろいろな文化を自然化するものとして近代があつて、もつと言うと古代の貴族文化から中世の武士が勃興する時代にもある種の脱文化があつて、自然に帰るわけでしょう。そして封建時代の文化ができて、近代の初頭にはまたそれに対する自然化があつて、そこから文化のさまざまな増殖があり、現代にはまた自然化が起こる。一方で脱自然的な技術の高度化はどんどん進んでいくと思うので、脱自然的なテクノロジーの高度化と、自然化は両極性みだいに振幅をもちつつ広まっていくとぼくは思っているんです。橋爪さんの話がそれと同じかどうかは分からないけど、少なくとも人間が技術の高度化とともに一方的に脱自然化するだけとは思いませんね。

リアリティの変容

橋爪——ここで今度の本では直接にはとりあげられなかったリアリティとアイデンティティの変容の問題について話したいと思います。まず私の考えを述べますと、リアリティは、あるリアルなものそのものではなくて、もともとその像だと思うわけです。知覚を考えると分かると思うんですけど、必ずここにリアルな何かがあると考えているわけですが、しかしそのリアルなものそのものをリアリティとは呼んでいなくて、それを私が知覚している、私という体を使って感じている、私の頭の中で認識して意味づけて価値づけている、そういうふうに写し取ったときにこちら側で再構成されたものがリアリティと呼ばれている。これはもともと像である一つの写し絵なんです。だからリアリティはその写像の仕方によって何種類もありうると思う。これがリアリティの最も簡単な定義ですね。人間はつねにリアリティを作りながら生きているわけです。

で、情報化とは、人間の知覚のメカニズムとは独

立にある写像の関係をこしらえていくことです。最近
は、特にそれが電子技術によって加速している。た
とえば絵を考えてみると、絵を見るときに実物が写
し取られた画像だなどもう一度知覚するという、二
重の関係になっていますね。ここで知覚の内容が
豊かになっているわけです。実物の花を見る代わり
に花が描かれた絵を見て、二重に楽しむ関係がで
きあがる。同じような関係が写真とか映画とか、そ
れから言語によるリアリティの写像にもあって、それ
がさらに複製されて、自分の知覚世界を間接化して
拡大していく。そうするとリアリティが多重化して高
度化していくわけです。ある人の知覚世界を別の
人が知覚するということが高度なかたちで簡単にでき
る、こういう現象が情報化ではないか。だから情報
化という現象はある人間がもっているリアリティに
対してかなり大きな変化を与えるんじゃないか。見
田さんがリアリティや情報化の問題に興味をもった理
由を忖度すると、人間が生きていくことの意味づけ
において幸せという価値観を語っているわけだから、
当然リアリティのあり方にまず関心をもつわけで
すね。で、情報化によるリアリティの変容にも関心
をもつ。次にここは資源問題とも関係がありますが、
人間が幸せになるために情報が重要な媒介変数
になるのだとすれば、これがいわば幸せの増幅装
置になる。リアルな物質があるレベルに抑えられ
ていたとしても、情報的な二次加工やリアリティの
あり方が豊かであればじゅうぶんに幸せに生きてい
けるのではないか。こういう回路で情報化／消費化
社会のあり方を問題にしたのではないか。そう想像
するわけです。

見田——情報化がある種の幸福の増幅装置になり
うるということはその通りだと思いますね。ぼくは情
報そのものは情報化社会以前にもあったし動物に
もあると思っているわけです。インフォメーションは
「フォーム(かたち)にする」ということでしょう。つまり
いろいろなマテリアーに対してかたちを与えることが
情報で、たとえばいまの幸福という問題に近づけて
言えば、何に対して喜びを感じるかという、それは

やはりどういうかたちを取っているかによると思っ
たんです。情報がある種の価値の源泉であったとい
うことは、原理的に言えば原始時代からずっとある
わけで、現在のいわゆる情報化社会とは情報のメ
ディア・テクノロジーが発達して、情報のもつ可能性
をメディアが増幅して、さまざまなかたちで発明したり
する可能性があるということはその通りだと思います
ね。

橋爪——ただ、情報メディアやテクノロジーの発達
が、人間が幸せになるための条件なのかどうかは
未確定だと思います。情報メディアなどなく、自然
のただなかに直立して生きている人間もかなり幸
せになれるのではないか。それから情報メディアが
発達すればするほど人間が幸せになる自由度が増
えるのかどうか、これは良く考えなければいけない
と思います。極端な例を挙げると、ビデオばかり見
て現実感を喪失し、連続殺人を犯してしまうよう
な、かつてはなかった可能性もメディアの中には開
かれているわけで、この辺に関して私は楽観できな
い感触をもっているんですが、情報化／消費化社会
が人間を幸せにする可能性の一つの原理的なパター
ンとして位置づけられているのだとすると、その辺
のことを少し伺いたいです。

見田——いま言われたのは考えるべき二つの問題
で、情報メディアの発達が幸福を増大させるかどう
かということと、自由度を増やすかどうかということ
です。ぼくは幸福を増やすかどうかは分からない
——不幸も増やすことは確かですね。そして幸福と
不幸の増大のどちらが多いかということ、厚生経
済学で議論されてきたように、計量化不可能です。
ただ自由度を増やすとは言えると思うんですね。自
由度を増やしたことは確かだから、やはり可能性を
開いたと思うんですね。つまり人がそこに見出し
うる幸福の選択肢が増えたという意味で。

橋爪——普通そう言われますね。たとえばバラとバ
ラの絵があると、バラを見ても良いし、バラの絵を
見ても良い。確かに選択肢は増えている。しかしこ
ういうことはありませんか？ 生まれたばかりの子供

が図鑑やインターネットに囲まれていて、魚といえは図鑑で見る、バラといえは絵で見る、つまりメディアを介する体験が第一になってしまい、実物はメディアと照合して初めて実物と考えるようになる。すると最も大事な体験の形式を失ってしまつて、幸福になる能力を、自分の身体と外界との関係を正しく認識する能力を失ってしまつているんじゃないか。これは良くある批判なんです。

見田——それは事実としていまどうなつていのかということに関して言えば正しい認識を含んでいるんですね。ただそれは、たとえばいま野鳥の絵しかなくて、本物の野鳥がふだん見られなくなったからだと思うんですよ。それは自由度は増えたんですけど、別の要因があつて、つまりももとの片方を消しちゃつたのが問題だと思うんですね。だから実際には選択肢が増えていないというのはありうることです。ただそれはメディア・テクノロジーが発達したからそうなつたと言うより、もうちよつと社会構造的な問題があるわけでしょう。

橋爪——バラの絵とバラがあるとき、ちよつと見ると選択肢が増えて豊かになつていっていますが、どちらがリアルであるかについてその二つが争い始めるわけですね。情報メディアがもたらすものが優先権をもつのか、自分が体で確認する実物が優先権をもつのか。普通は実物のはずなんですけど、情報化があまりに権威と影響力をもつているために逆転する。逆転すれば数が増えて豊かになるのではなく、別のリアリティに入り込んでしまふだけということになります。

見田——それはどうして起こるかという、ぼくの結論だと情報メディアだけのせいではない。あるものに対しては非常にリアリティを感じたり、そうでなかったりするわけでしょう。そこには他者の支えがあると思うんですね。つまり自分にとって大事な他者にとつてもリアルであるようなものが支えとなる。プルーセントに「いま目の前にあるバラはリアルなものではないよと思う」という話がある。子供のころに見たバラだけがリアルに感じられる、という。それは子供の

ころ家族や親しい人と共通の大事なものとしてみたバラ、という構造があるんだけど、いまテレビで見たものの方がリアルに見えるというのは、他者の構造が変わつてきたのではないかと。つまり自分にとって大事な他者、子供で言えば学校の友達か、みんな共通して見ているのはテレビなわけです。すると「あそこに出てきたあの場面」というのが非常にリアルに感じられるのではないかと。映像メディアというテクノロジーそれ自体ではなく、どういう他者とその対象を共有するかということに関わつていんじゃないかと。橋爪——確かに全部映像メディアのせいにしてしまうのは行き過ぎかもしれないけれど、でも無関係とは言えないと思うんです。昔だったら子供が集まつて野良犬を育てたり、そういう共通体験を通して生きていふ犬とか猫の意味を強烈に体験したけど、いま共通体験できるのは「たまごっち」だけで、メディア的なツールを使って間接的な生命についてのイメージを共有する。生命を体験しつつ自分でイメージを作るのではない、そういう様式になつているとすれば、そういう二次的な体験の場を作り出すメディアは情報化／消費化社会のメディアなんだから、責任がないわけではない。

見田——責任がないというわけではないけれど、なぜテレビとか「たまごっち」とかのメディアの方がリアリティをもつに至つたかという、やはり他者との関わりの構造が入つてきていると思うんですね。

橋爪——それは良く分かるし賛成なんですけど、次の質問としては、そのように他者との関わりが変化し、メディアとの関わりも変化して、情報化／消費化社会では新しいリアリティをもつ人が増えてくるときに、人間が幸せになるという根本的で永遠の課題にとつてどういう意味をもつのでしょうか。それはプラスなのかマイナスなのか、それともニュートラルな可能性なんでしょうか。

見田——テクノロジー・メディアの与える影響という点だけについていえば、ぼくは基本的にポジティブだと思います。ただネガティブな面があるのも確かですが、そういうネガティブな面はテクノロジー・メデ

イアの発達自体から来るのではないんじゃないか。
橋爪——そうするとテクノロジー・メディアに適切に対応する行動様式や文化がまだそなわっていないということですか。

見田——それもありますが、もっと単純なことで、やっぱり自然の解体とかそういうことにつながる問題ではないか。そっちの方から来るネガティブなリアリティの解体があるわけで、それはメディア・テクノロジーの高度化とどこかで関わっているかもしれないけれど、高度化したから解体したという話ではないと思います。

橋爪——私は両者が、メダルの表裏ではないかという可能性を考慮したいんですけども。

見田——自然の解体とテクノロジー・メディアの勃興とは確かに同時進行してお互いに絡み合っているんだけど、ファクターとしては引きはがした方がいいと思いますね。全部くっついてどれもこれもワンセットなんだぞと言うと、未来は出てこないと思うんです。個の自由という近代の成果は絶対に擁護しながらも、近代のいろいろな面に関しては批判していくことが必要のように、現代に関してもそういうことが必要だと思うんです。ファクターとして離して考えることができると考えた方が、社会構想論としては良いんじゃないかと思います。

橋爪——私もメディア・テクノロジーは押し止められるものではないから、これとうまく付き合う方法を考えた方がいいというのは賛成なんですけど、ただ、自然の解体とメディア・テクノロジーの問題はかなり密接な関係があるように思います。養老孟司さんが書かれているのを読みますと、脳と自然が大きく対立していて、それは都市とそのほかのコントロールできない自然環境との問題なんですね。イメージがイメージを生んで、リアリティがメディアの中で再生されていく、それが「他者も同じことをやっている」というスタイルにおいて強化されている。そうだとすると、この本でも大きな話題になっていた、産業社会の入口・出口が消されて、そこでじつは自然が破壊されて踏みこじられていくことと同時進行している可能性

が極めて高いんじゃないかという気がします。

見田——それはその通りだと思うけど、どういう未来社会を構想していくかという話で言うと、たとえば100ヘクタールの緑の原野があるとすると、そこに平屋しか建てられないテクノロジーならば土地を全部埋め尽くすことになる容積でも、54階建て(この対談は54階で行なった)の建物を建てられるテクノロジーがあれば、周りに90%以上の緑を残したままで同じ容積を建てられる。テクノロジーと自然の関係で言えば、ぼくはそのように要素を分解して組み合わせることは可能だと思うんです。

橋爪——平屋ではダメで高層ビルを建てよう、それは高層ビルが素晴らしいからではなく自然が大事だからだ、と人々が意志したときにそういう選択がなされるんだと思います。ただ問題は本当にそう意志するかどうか、自然を切り拓いて平屋で埋め尽くす感性をもった人たちが、一体どういうメディア、思想によってそこまで自分をコントロールする発想を手に入れるか、メディアの中にそれが滲み込んでいるか、ということだと思うんですが、少なくともいま私たちがメディアを使ってやりとりしている情報の中には、そういう文明をコントロールして自然と共存しているという強い倫理と思想性をもったものはあまりない。たとえば、いま若い人が熱狂するのはフィクションが多い。ゲーム、アニメ、ドラマといった、メディアの中だけに存在するものをうわさ話にしていくというパターンです。ノンフィクション系が力を失っていて、これがどこかの現実につながっていて、現実をよりよく認識するために高度なメディアはあるんだ、という前提で彼らはメディアを受け取っていないと思うわけです。もしそうだとするなら、彼らは平屋に住んでいようが高層住宅に住んでいようが、まったく痛痒を感じないと思うんです。

見田——でも別の意味ではノンフィクションに対する人気はあるんじゃないか。ニュースショーが各局のゴールデンタイムの前後に定着して視聴率をあれだけとというのは、以前には考えられなかった。それには両面があって、確かにドラマタイズしている

から人気があるんですが、同時にそのショーの背後にこれはニュースだぞ、というのがあって、そこで魅きつけている面があるんじゃないか。

橋爪——そこが映像を主体にしたいいまのメディアの特性だと思うんですね。活字だけの時代には、フィクションとノンフィクションとは明確に分かれていて、どこかに本当の真実というのがあって、それに迫るのがノンフィクションだという、それ自身神話に近いかたちを取っていた。これは非常に強固な思考習慣のようなものだと思うわけです。宗教的な前提に遡るような、真実への、自分の外側、社会の外側への止みがたい追求の欲望みたいなものですね。外側に何か確たるものがあるであろうというのは近代の王道の一つであった。だから認識の中では自然が社会を支えているとか、真実が私の認識を支えているとなっているけど、じつは社会があるのでその外側に自然があり、自分の認識があるのでその外側に主体があるというふうに逆に生産されている可能性だってあるわけです。その生産の方式が、このメディアの時代になって、フィクションとノンフィクションがその境界を超えて融合してくるという変容を遂げているだけだと考えることもできると思うんです。そしてこの仮説をさらに推し進めると、近代の立脚点であった自由と個というものが社会の外にある絶対の立脚点かどうかという問題があって、これが一世代前のフィクション／ノンフィクションという時代のノンフィクションのリアリティの立つ水準なんですね。だけどこれは市場が要求する欲望として、つまり近代の制度的なシステムが要求する個を無限遠点に投影したもの、という可能性もある。同じことは私にも言えて、私のよって立つ補助線が近代の要求したものだ、ということももちろんあるわけですが、こういうことについてどうお考えかについてうかがいたいのですが。

見田——それは大問題ですね。その究極の問題は分かるけど、もうちょっとポイントを絞ると、どういう問題ですか。

橋爪——たとえばさっき本当のバラと絵のバラがあ

って、絵のバラが加わるとリアリティが豊かになって、幸せの度合いが増えるという比喩がありましたね、そしてそれに対して、本当のバラがなくなっちゃって、絵のバラの一つの印象になってしまうから増えていないという話がありました。こういう議論が成り立つためには本当のバラを確認できる本当の私がいって、という前提が認められていますよね。しかし情報化／消費化社会の中で生まれ育った新しい知性が出てきて、あなたたちが言っていた本当のバラも、メディアの中のバラも、じつはどちらもそう区別がつかないと言われてたらどうするか。見田さんのような情報化／消費化社会以前の人たちが情報化／消費化社会を見ているときには実物のバラとメディアに映ったバラを区別していた。なぜならば実物のバラは私が体で確かめられる、バラは自然でありそこにある、メディアはそこにはないので二次的である、こう言ってリアリティの種類を区別する。しかしそれは情報化／消費化社会のメディアが発達していなかったころの習慣であり、われわれはそれらを区別しない、それは情報化／消費化社会が発達したわれわれの習慣である、これは権利として同じことだ、と言う可能性です。

見田——そこには、それは本当でないのかという哲学的な問題と、そういうジェネレーションが出てきたときにどうなるかという話があると思う。前者はまさに哲学がずっとやってきた問題で、結局論証不可能だと思いますね。「自然は本当にあるのか」とか「他者は本当にいるんだろうか」という話を論証することは不可能だと思うんです。そして不可能だけど、ぼくは実際本当に自然があることや他者がいることを信じているわけです。だけどそれは本当ではないんじゃないかという論証は、やろうと思えばいくらでもできると思うんですよ。ぼくはその問答はほとんど不毛だと思っているから、そういう哲学上の議論をする人に対しては、自然や他者の存在を信ずるということは、ぼくの信仰ですと言っちゃいますね。それから社会現象として、メディア上のリアリティと、実際にここにあるコップなり庭に咲いているバラなりと

いものがいれば存在としてまったく同一のものじゃないかと感受する人が出てくることに関して言えば、やっぱりそうじゃないものが残るだろうと思っているんです。つまり人間には身体性があるって、切ると血が出るとか食べないとお腹が空くとか叩けば痛いとか、そういうことが残るだろうし、どんな都会にも風とか空があるから、ぼくはある種のメディア理論家が言うほどに、すべての人がヴァーチャル・リアリティの中に生きるという時代が来るのでもないだろうと思っているんです。

橋爪——もう一つそういう人が何を言うかという、近代はここに来て次の時代に入る。前の近代は実物とかリアリティとか個とか自由というものを実在するものと考えてその上に近代の制度を作ろうとした。だから近代に対する批判が近代の中で可能であった。でも情報化／消費化社会では自分を批判する根拠を自分の中にもっているとは考えないのだから、そういう批判は意味がないし実行しない。こういうのは自己準拠系なのかもしれませんけど。

私は自由とか個を派生させるものとして言語が考えられるんじゃないかと思ったわけです。その場合の利点は、唯一といっても良いかもしれませんが、この情報化／消費化社会を考えた場合に実物のバラに対してはバラの映像があるけれど、言語に対しては言語の映像はないんです。どんなに映像を作っても言語は言語なんです。だから文字情報に関してはリアリティを変容させない。変換しても、もともと言語は映像ですから言語として保たれているわけです。そういう意味で、より根拠になりやすい。

社会のミニマリズム

橋爪——『現代社会の理論』で興味深かったことは、ルールと規律は少ない方がいい、その方がそこに乗ることができる個人の自由が増える、という話がありましたね。

見田——少ないというより、単純な方がいいんで

すね。

橋爪——私はルールのミニマリズムと言っています。マルクス主義で最大限綱領と最小限綱領というのがあって、最大限綱領の方が言いたいことを全部言っているからいいというのと、最小限綱領の方がいろいろな人が加われるからいい、という議論があったんですけど、最小限綱領というのは美術でいえばミニマリズムだと思います。必要な要素を最小限もち込み、いろいろな人がいろいろな思いをそこに見ればいいじゃないかという表現のかたちだと思うんですが、社会のミニマリズムということを考えてみてはどうでしょう。具体的な文化紛争とか民族紛争は近代なんだけど歴史的な経緯でキリスト教とか、マルクス主義とか、付加的なルールがたくさんあることに困っていると思うんですけど、近代の成果を最大限に享受しつつ大勢の人間が自由に生きるためには、ルールのミニマリズムがよい。強制は必要だとは思いますが、最小限であるべきだ。最小限であることが証明できれば、それは倫理的に正しいから強制しても誰も深い意味では傷つかないと思うんですね。それに似ていると思ったので、そのへんの真意をうかがいたいのですが。

見田——それは意識的に書いたのですが、念頭にあったのはル・コルビュジエの建築論です。彼はモダニズム建築の教祖みたいな人で、モデュロール(標準尺)を使った巨大なアパートを作って、それは無味乾燥で人間を画一化する、という大衆社会批判みたいな批判が当時からあったわけだけど、それに対して、むしろシンプルな方がそこに住む人間は自由なんだと言っている。つまりいろいろ作りつけのものがあるとその間取りでしか住めないが、最小限の必要なユーティリティがあれば、あとは住む人が個人個人でどういう趣味でどう仕切ろうと自由なわけです。基本の枠組みはシンプルなほど、かえってその中で個人が自由を選べるという。それは非常に共感するわけです。一見画一的だと言われるんだけど、じつはそうだからこそ各自が個性を発揮できるという構造は、たぶん社会構想論のモデル

として活かせるんじゃないか、その発想は近代の一番良いエッセンスじゃないかと思うわけです。

橋爪——巻末に書いてある今後の予定の中で、「社会構想の重層理論」というのが、もしかするとこのことを考えておられるんじゃないか、ルールや規則のミニマルなレヴェルと、マクロな制度を接近させよう。そしてその内部にそれと調和するかたちで最大限の個人の自由を共存させようと、そういう構想のことでしょうか。

見田——橋爪さんが見抜かれたとおりで、基本構図はそのとおりです。内部のイメージは個の自由ということなんだけれども、その中にある種のシンフォニシティとしてのコミュニンというものを実現させたいということを考えている。だから20年ほど前に「交響するコミュニン」[★5]と書いていたとき『現代社会の理論』では、スタイルはずいぶん違うけど立場が変わったわけではない。関係性のユートピアとしてのシンフォニシティみたいなものが全域的でありうるといふ幻想が、たぶん20世紀の最大の実験の失敗の原因で、ようするにコミュニズムはコミュニンのお化けだと思わんですが、数人とかせいぜい数十人でしか具体的に可能でないものを全域的であるかのように幻想したのが基本的な間違いなので、全域のルール、あるいはコミュニン間関係のルールとしては、ぼくは市民社会の方が正しいと思っているわけです。

橋爪——コミュニンの未来の可能性を証明することとは別に、コミュニンを超えるマクロな社会にはマクロな設計が必要で、それをミニマルに構想すべきだということを書かれたわけですね。そうすると次に興味深いのは、では具体的にどのような規則やルールや内容がここで考えられるか、ということなんですが。

見田——それは大事な問題ですね。

橋爪——もともと近代社会そのものもその考えでできていて私は思うんです。では見田社会学とはどこが違うか。近代社会の原則は人権から出発するんです。つまり一人ひとりに権利が割り当てられて

いるという前提です。権利は義務をその裏腹に内包しています。だから自由の制限を内包している。そしてある人の自由と別の人の自由は両立しないという想定に立っているんで、人々の間に線を引いて、Aの権利はBの義務、Bの権利はAの義務というかたちでお互いにタッチしない。その公共性という関係を遮断する明快な原理で法律をかぶせることができています。これは一つのミニマリズムだろうと思うんです。見田さんの場合何があるかと言うと、自由と欲求です。これらの権利との一番の違いは、それを制限する原理がその内部に必ずしもないという点です。ここからミニマリズムを考えてくる場合に、それを制限する原理をどのようにもつてくると一番フィッティングなのか、ここが一番みんなが興味をもつ点だと思うんです。

見田——それは大変具体的な質問だと思うんですが、長い話になる。最近書いた「公共圏と交響圏——社会構想の重層理論」[★6]という論文は、いままさに言われた問題を原理的な水準で扱っていて、それを読んでいただければと思いますけど、橋爪さんの考えとかなり合致するんじゃないかと思います。 ※

(1997年6月26日、東京にて)

■注

- ★1——見田宗介『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書、1996。
- ★2——真木悠介『人間解放の理論のために』筑摩書房、1971。
- ★3——見田宗介『価値意識の理論』弘文堂、1966。
- ★4——真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店、1981。
- ★5——真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニン』筑摩書房、1977。
- ★6——見田宗介「公共圏と交響圏——社会構想の重層理論」岩波講座「現代社会学」第26巻『社会構想の社会学』岩波書店、1996。

みた むねすけ：1937年東京都生まれ。社会学者。東京大学教授。主な著書に本文で挙げたほか『近代日本の心情と論理』（講談社学術文庫）、『現代社会の存立構造』（真木悠介名義、岩波書店）、『自我の起原』（真木悠介名義、岩波書店）などがある。

はしづめ だいさぶろう：1948年神奈川県生まれ。社会学者。東京工業大学教授。著書『言語ゲームと社会学論』（勁草書房）、『はじめての構造主義』（講談社現代新書）、『性愛論』（岩波書店）、『橋爪大三郎の社会学講義』1・2（夏目書房）など。